

# 話し言葉における文末表現「ッテ」について

守時 なぎさ

【キーワード】 引用 情報源 コンテキスト 対話の継続 メタ言語的な発話

## 1. 研究の目的

話し言葉には、話し言葉特有の表現や用法が見られる。「～ッテ」という表現もその一つであって、親しいもの同士のくだけた場面で使われる。注1

### (1) (梅雨時のアパートの住居環境について)

1 N: いいなあー、冷風機、でもねえなんか一階にアパートの一階に住んでいるひとが一、なんかこう、雨が降ると梅雨時なんかスケートができちゃうッテ。

2 T: へえー

3 N: しっけるんだってー／／わたし二階だから全然わかんないけど。

4 T: 気持ち悪い (談話TN) 注2

(2) 1 C: うーん、でもとりあえずはさ、なんか、まだまだこう、そういうしがらみをつく、つくりたくないなみたいな。

2 D: うん、あるある。

3 C: なんか、もう。

4 D: 誰かのは呼んでほしいけど自分はそうなりたくないッテ。

5 C: そう (談話CD)

例(1)の場合、書き言葉や、より改まった場面では「(…スケートができちゃう)と言っていた／と言った」などの表現が使われるだろう。例(2)は、もし別の表現を使うとすれば、「君が言いたいのは(…自分はそうなりたくない)ということか」となるだろう。

本稿の目的は、話し言葉の文末注3にみられる「ッテ」の語用論的な機能を明らかにすることである。話し言葉の「～ッテ」という表現を分析することは、書き言葉における「という」に関連した表現を分析するにも、新たな視点を提示すると考える。

## 2. 先行研究とその問題点

国立国語研究所による『現代語の助詞・助動詞』(以下、「国語研1951」と省略する)は、現

代語の助詞・助動詞を広範に扱っている。「ッテ」については、[Ⅰ]格助詞／[Ⅱ]係助詞／[Ⅲ]終助詞の3類に分け、それぞれの用法を記した。本稿に関連する「終助詞の用法」は、次のように示されている。

### (3) 終助詞

①他人の話を紹介する。（「ということだ」の意）

「おかァさん、ねえちゃんは詩をつくってるからだめだって…」

②ひとのことばを、おうむ返しにくり返して反問する。

「へんなところにいるんだな 犯人をつかまえたよ」「つかまえたって？」

国語研 1951 の分類は、「ッテ」に前接する表現が誰によって行われているかという基準による。その表現が、その会話に参加していない第三者が発話した場合が①であり、現在行っている会話の相手が言った場合が②である。なお、①の例では「他人」に二通りの解釈の可能性がある。一つは「ねえちゃん」がだめだと言っていた場合で、もう一つはねえちゃん以外の誰か他の人が「ねえちゃんは…だめだ」と言っていたという場合である。いずれにしても、当該の表現を発話したのは、会話に参加していない第三者であることに変わりはない。

一方高橋 1993 は、「ッテ」を談話における省略によってできた述語形式として位置付けた。「接続助辞のついたかたちでおわる文」「条件形でおわる文」「第二中止形（筆者注：＝テ形）でおわる文」などと並んで、「～ッテ」の表現は「引用助辞のついたかたちでおわる文」に分類される。

### (4) 『引用助辞のついたかたちでおわる文』

テーマづくりの形式になる場合…ふつうはといかえしである。

「籍を入れてよ」（略）「籍って？」

レーマにつく場合…特定のひとがいったことをしめし、終助辞がよくつく。

「俺たち、同じ災難にあう運命を持っているんだってサ」

高橋 1993 の注目すべき点は、「ッテ」を談話の流れの中で考察した点である。引用助辞が導く節を誰が言ったかということと、談話のテーマ・レーマとを関連して分類した。

ふつうの「といかえし」はテーマになることが多く、特定の人が言ったことを示す場合はレーマになることが多い。では、高橋 1993 によると、次の例はどちらの分類と考えられるだろうか。

### (5) （火災が発生したビルの屋上で）

A：さあ、早く。ここから飛び降りるんだ。

B：そんな、飛び降りるッテ…

例(5)は、前の人の発話をそのままくり返しているが問いかえしてはいない場合である。Bの発話は、後続の文脈で「(飛び降りる)というのは」の意味でのテーマになるだろうと想像するのは難しい。だが、レーマの用法と考えるのにも疑問がもたれるし、終助詞も付加しない。高橋 1993 の分析は、テーマ・レーマが明らかでないことと、「引用」の観点が本当に対応するものかどうか、疑問である。同時に国語研 1951 の分類では②に分類されるのだろうが、「反問してる」という印象は受けない。

また、次の例(6)はどうだろうか。

(6) 母：早くしなさい。

子：今行くよ。

母：ほら、遅刻するわよ。

子：わかってるよ。今行くッテ。

この例では、「今いく」という部分は話し手自身が発話したことをくり返している。このような例は、先行研究では考察されていない。

ここで省略について述べておきたい。「～ッテ」のように、何かが省略されていると推定される言語形式を分析するには、省略されているであろう要素を復元してそれをもとに分析する方法と、国語研 1951 や高橋 1993 のように言表そのままの発話を分析する方法とが考えられる。本稿では、たとえある要素が省略されているとしても、それが省略されているにも関わらず、依然コミュニケーションが成立することに注目し、国語研 1951 や高橋 1993 のように言表そのままの発話を分析するという立場で考察を進めたいと思う。先の例(4)のテーマの用法と(5)を、「～ッテ」の後ろに「～というのは」などの言語形式が省略されているかどうかという観点から別の用法と考えるよりも、「聞き手からの発話をくり返している」という共通点に注目して同類の用法と考える方が、他の用法との異同が明らかになるのではないかと考える。ただし、省略されていると推定される要素については、「ッテ」の用法との関係において、今後考察しなければならないと考えている。

なお、今回は「～ッテ」の言表の発話による分析を行い、「～ダッテ」「～ンダッテ」といった表現とイントネーションとの関係についても触れることができなかった。イントネーションも「～ッテ」の用法と深く関わってくる問題だと思われるが、考察は別の機会に譲りたい。

### 3. 分析の対象となる範囲

本論で考察する「～ッテ」は、文末と考えられる場所に位置するもので、終助詞等が承接して

「～ッテヨ」「～ッテサ」「～ッテバ」などとなる場合も含む。

例(7)のように述部が倒置されていると考えられるものや、例(8)(9)のように文中で用いられているものについては、考察の対象外とする。

(7) 1 D : うん。で、J君もまあたぶん行くだろう。

2 C : うん。

3 D : あとN君か。

4 C : うん。そっか。

5 D : 4人? 絶対行きそうなのッテ。 (談話CD)

(8) (コンピュータのマニュアルを読みながら)

ねえ、ねえ、プロトコルッテナあに?

(9) 首都高を走って6号に抜けるッテ方法もあったんだけどね、…。

なお、今後、構造上「ッテ」が導いている部分を『「～ッテ」に前接する部分』あるいは単に「～」と記すことにする。

## 4. 用例の分類と分析

### 4.1. 用例の観点

「～ッテ」は、「という」という表現と密接な関連があると思われる。文末の「という」は引用の観点から論じられることが多かったが、本稿では「～ッテ」を引用の概念より次の二点に基づいて分析する。

I 「～」が、既に述べられているか否か。注4

II 「～」が、誰によって提供された情報か。

Iは、誰かが既に「～」と述べているかどうかということである。ここには、発話だけでなく、話し手が新聞や雑誌などから得た情報も含まれる。IIについては、それが誰の発話や何の記述によるものかということで、次の3つに下位分類できる。

① 「～ッテ」の話し手注5

② 聞き手

③ 談話に参加していない第三者、メディアやテレビなど

一方「～」が直接述べられていない場合は、一見その情報源注6を特定するのは不可能に見えるが、文脈より推定することができる。

(10) 1 C : うーん、でもとりあえずはさ、なんか、まだまだこう、そういうしがらみをつ

く、つくりたくないなみたいな。

2 D : うん、あるある。

3 C : なんか、もう。

4 D : 誰かのは呼んでほしいけど自分はそうなりたくないッテ。

5 C : そう (談話 CD)

4 D 「ッテ」の表現の「誰かのは呼んでほしいけど自分はそうなりたくない」という発話は、1 C の発話内容と密接に関連している。すなわち、4 D の発話は、聞き手である1 C の発話ををうけて、表現を変えて述べたものである。そして、情報源は聞き手の発話1 C であると推定される。つまり「～」の情報源は、明らかに特定されるタイプと、推定によって求められるタイプがあるということである。したがって、分類は下のようになる。

(11) I - ① 「～」は既に述べられており、話し手の発話が情報源である。

I - ② 「～」は既に述べられており、聞き手の発話が情報源である。

I - ③ 「～」は既に述べられており、第三者から得た情報である。

II - ① 「～」は述べられてはいないが、話し手の発話が情報源と推定される。

II - ② 「～」は述べられてはいないが、聞き手の発話が情報源と推定される。

II - ③ 「～」は述べられてはいないが、第三者の発話が情報源と推定される。

以下、この分類に基づいて例を検証していく。

## 4.2. 用例の分類と分析

I - ① 「～」が既に述べられており、話し手の発話が情報源である場合

これは、「～ッテ」の「～」という表現を、話し手がそれまでの文脈の中で既に発話している場合である。

(12) (母と子の会話・子の友人が実家を見たときの話)

1 母 : あー、タケイ、タケインちここだっつったか。

2 子 : まー、そんな感じだなー。(笑い)

3 母 : ぼろい家だなんてわなかった?

4 子 : それは(笑い)言わなかったけど。

5 母 : や、でかい家だっつったか?

6 子 : それも言わないな。//



2 B 「つかまえたッテ？」

(15) 1 C 「籍を入れてよ」 (略)

2 D 「籍ッテ？」

ここでは、「ッテ」は聞き手の発話の意味や意図を問い返すという役割を担っている。談話は、談話に参加している人がお互いの発話を理解しあいながら進めていくものであるから、何らかの原因で理解が阻害された場合は、談話を続行することが不可能になる。このとき、問題になっている表現をマークするのが「ッテ」であり、言葉自体の意味や発話意図を尋ねるのである。

I - ③ 「～」は既に述べられており、第三者から得た情報である場合

「～」が、談話に参加していない第三者や、雑誌やニュースなどのメディアから得た情報を提示している。

(16) (共通の友人 I が、カレーを作り E の家に来たときの話。)

1 E : で、／／コリアンダーとか、あなたぐいのやつー？

2 N : 胡椒

3 E : ガラムマサラとかーやたら買い込んできて

4 N : うん

5 E : でうちにおいといてもしょうがないとかッテ

6 E : わたしんちにそのまま置きっぱなしなんだけどー

7 N : はは (談話 E N)

(17) (新聞を見ながら)

「明日、晴れるッテ。」

情報源は、それぞれ (16) は友人 I、(17) は新聞である。話し手はこれらの情報について、他から得たことを「ッテ」で示しているという用法で、「～」が既に述べられている第三者の情報である場合は、このような引用の用法が多い。

II - ① 「～」は述べられてはいないが、話し手の発話が情報源と推定される場合

ここに分類されるのは、「～」が直接発話されたわけではないが、そのように表現するのが話し手自身だと推定される場合である。

まず、次の例を見てみよう。

(18) (体力作りのためのジョギングの話)

- 1 I : いくら走ってもなんていうの、あんまり重くないのね、体が  
2 J : うんうんうん  
3 I : だからきっとそれが3週間ぐらい走り込が続くと、  
4 J : うん  
5 I : だんだん疲れてくるんだろかなとか思って  
6 J : うん  
7 I : だからまあできるところまでやってみようかなッテ。  
8 J : (笑い) (談話 I J)

例(18)は、話し手Iがジョギングを始めてみたが、続けられるところまで続けてみようと思っ  
ている、と話し手Jに説明している場面である。7Iの「～ッテ」は話し手の思考の表明と考えられ、  
「～」はその内容と考えることができる。

例(19)は、「～ッテ」の発話の前に同じような表現がくり返されている場合であったが、次の  
例は「～」に類似した表現が先行する発話中に見あたらない。

- (19) 1母 : テレビばかり見てないで、はやく勉強しなさい!  
2子 : 今するッテ! (作例)

この例も、先行する類似した発話こそないが、先にI-①で見た例と同様に考えることが可能で  
ある。この文脈を考慮すると、子は、すでに「今から勉強を始めよう」「母親から言われなくても  
勉強をするつもりである」と思っている場合にのみ、2子のように発話する。このような前提がな  
い場合には、「はい、じゃ、今からするよ」など、「ッテ」を使わない発話が観察されるはずで  
ある。つまり、この「ッテ」は、話し手が提示しているつもりの情報を聞き手が受け入れていないと  
感じた場合に、「ッテ」でマークして提示する用法である。

次の例では、「～ッテ」が話し手の思考や発話をのべたてたものと考えるのは難しい。直感的に  
は、自分の発言に無責任そうだとか、語調が弱まっているなどという印象を受ける。

(20) (大学院試験の合否の予想)

- 1D : まあ、今年は何人通るか。  
2C : どうだろうね、6人ともみんな通ればいいけどね、女の子ね。  
3D : なんか、通りそうな気がしない?  
4C : んそうだね  
5D : Sちゃんたちはおもいきり変なことしないかぎり  
6C : うん



7D：まあ、無難に行けば通るでしょ？

8C：うん、通らなきゃね（笑）

9D：ちょっと、通らなきゃ、問題だなッテ。（談話CD）

9Dは話し手が「～」のように思っていることを表現している発話ではない。話し手Dは5Dや7Dの発話から、「友人は6人とも合格するはずだ」と考えていることがうかがえる。9Dはそれまでの発話とほとんど同じ内容のことを表現を変えて述べているといえ、「～ッテ」という表現は、話し手が伝えたいことをより具体的に、かつ詳しく聞き手に伝えていると言えよう。

以上見てきたように、「～」がまだ談話で述べられていない「～って」は、大きく3つの種類に分けることができる。まず一つは、「～ッテ」が発話や思考など言語表現に関わるものである。一人称、すなわち話し手が発話すること、考えたことを表明するような用法である。二つ目は、話し手の強い主張が感じられるものである。これはI-①でみた用法に通じるものであり、話し手は自分の発話を何とか聞き手に聞き入れてもらおうと発話するような場面でのよう方である。最後は、それまでの談話の流れから「～ッテ」が既になされた他の表現の言い換えになっているようなものである。この3つめの用法では、「～ッテ」は今課題になっている事柄を、話し手と聞き手の間がより詳しく、正確に理解しようとするための表現手段と言えよう。

## II-②「～」は述べられてはいないが、聞き手の発話が情報源と推定される場合

ここに分類されるのは、「～」が直接発話されたわけではないが、聞き手自身による発話をもとに、話し手がそれに類似したことを異なった表現で提示したり、聞き手に代わって結論を述べているものである。

### (21)（未だ結婚したくないという話）

1C：うーん、でもとりあえずはさ、なんか、まだまだこう、そういうしがらみをつく、  
つくりたくないなみたいな。

2D：うん、あるある。

3C：なんか、もう。

4D：誰かのは呼んでほしいけど自分はそうなりたくないッテ。

5C：そう

（談話CD）

「～」は、実際に発話されたものではなく、1Cの発話や文脈を踏まえての表現である。話し

手Dは、聞き手Cの言いたいことは「～」ということだろう、と推測して提示している。興味あることに、この例では、聞き手Cは、自分の言いたいことを表現できない様子が観察される（3Cの

発話)ののだが、それを助けるように話し手Dが聞き手Cにかわって4Dを発話している。聞き手Cは、5Cで4Dの表現が自分が表現したことと比べて、妥当なものであったと評価し、以後談話を継続していく。

また、次のように「～ッテ」が、疑問文として発話されることもある。

- (22) 1 A : あーあ、昨日も寝ちゃった。  
2 B : あらら。  
3 A : あと一週間で締切なのに。  
4 B : 今夜こそ寝ないでがんばるぞッテ?

これは、4Bが、1A/3Aから推測して表現した発話である。話し手は1Aや3Aから聞き手が何を言いたいかを推測して、4Bのように表現しているのだが、ここでは特に、話し手Bは聞き手Aが言ったことを「～」のように理解しているのであるが、その理解の妥当性の判断を聞き手に委ねているというものである。

## II - ③「～」は述べられてはいないが、第三者の発話が情報源と推定される場合

ここに分類されると考えられるのは、「～」は述べられてはいないが、談話に参加していない第三者が発話したと想定してそれを表現する場合である。次の例を見てみよう。

- (23) 1 椎名 : 電車の中なんかで、威張っているんだけど、周りは部下じゃないから…。いまいましいって顔している人っていますよね。  
2 東海林 : 癪だろうね。  
3 椎名 : 本当は偉いんだぞ。  
4 東海林 : なんか救ってやりたいね。よく、元ナニナニっていう名刺を持っている人っているでしょう。もらっても困るけど、気持ちはすごくよくわかる。元はこうなんだ、  
恐れ入ったかッテ。 (椎名 240)

(23)も下線部は、それまでの談話の中で発話されたことではない。例(22)は「元ナニナニっていう名刺を持っている人」が思っていることを話し手「東海林」が推測して表現しているものである。

## 5. まとめと今後の課題

談話は、話し手と聞き手が情報の交換を行いながら、共有する知識を増やしていく行為である。ここでは、ある発話が提示された後、それが適切に理解された場合は、互いの了解事項と認定されコンテキストの一部となる。しかし、適切に理解されなかった場合は、話し手および聞き手は対話の継続を一時中断して、問題となった表現や情報について互いに確認する必要がある。これが、「ッテ」の使用環境である。「ッテ」の語用論的な機能は、次のように言えよう。

(24) 「～ッテ」は、話し手が、情報源となる情報を談話の参加者が適切に理解していないと推測し、時には対話の継続が困難であると考えた場合に使用される。

すなわち、「ッテ」は、情報源の情報が適切に理解されていないことを示すという談話的な機能を持つ。同時に「～ッテ」という表現を用いることは、「～」がコンテキストの中に正しく位置付けられ理解されることを望むという話し手の聞き手に対する意図を表す。

例(20)について「直感的に自分の発言に無責任そうだとか、語調が弱まっているなどという印象を受ける」と述べたが、この印象はまさに「ッテ」がもつ機能から派生している。情報源の情報をコンテキストの一部として認めていない、つまり了解事項と認めず、「～ッテ」で談話への位置づけを試みるのは、「～ッテ」で情報源の情報を説明しようとしていることである。「～ッテ」と表現する時点でも、この表現は発話者の真偽判断や確信を表現しているものではない。これは、「～と言う」という引用文で引用句のモダリティは、発話時における話し手の心的態度を表していないということに通じる現象だと思われる。つまり、「～ッテ」の「～」が話し手の心的態度を表さないので、「～ッテ」と提示されたときに、無責任とか語調を弱めているといった印象が派生してくるのだと考える。

メイナード1994も述べているように、「という」という表現は、表現自体を示すことができるメタ言語的な特性を持っている。この特性は、談話における情報内容の理解や態度といったものと深く関わっている。「ッテ」の表現もメタ言語的な特性を持っており、情報を提供し、共有知識を増やすことを目的とするいわゆる対話の談話とは異なった談話に現れる表現と考えることができる。「という」に関連した多くの表現は、「引用」を考察する上で新たな視点を与えると同時に、談話の構造について考察する上でも重要な要素になるとと思われる。

### 【注】

1. 書き言葉でもこのような表現が見られることがあるが、手紙や日記など、やはりごくくだけた場面に限定される。

2. 談話を記述する際に使用した記号については、ザトラウスキー 1993 に準拠した。主な記号については次の通り。

// … その記号の箇所で、次の発話が重ねて発話される。

。 … 下降イントネーションで発話が終わる。

? … 上昇イントネーションで発話が終わる。

3. 話し言葉における文の定義については、未だ定説はないが、本稿では、①音声的にまとまりがあり、後続していない、②意味的にまとまりがある、という条件を満たすものを「文」と見なす。
4. 「～」という表現が直接引用であるか否かという議論は、本稿の主張と直接関係がないので、ここでは触れない。
5. これ以後、「話し手」は「～ッテ」の発話者を、「聞き手」は「～ッテ」が発話された時点での聞き手を指すこととし、この名称はその前後のターンの移行に関わらず用例の談話中、統一して用いるものとする。
6. 「～ッテ」の表現の「～」が、誰かによるある発話や記述によると考えられる場合、その基になる発話や記述を「『～』の情報源」と呼ぶことにする。

#### 【参考文献】

- 国立国語研究所 1951 『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』（国立国語研究所報告 3）
- ザトラウスキー, ポリー 1993 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 砂川有里子 1989 「引用と話法」北原保雄編『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体（上）』明治書院
- 高橋太郎 1993 「省略によってできた述語形式」『日本語学』9月号 12-10 18-26p. 明治書院
- 田窪行則 1989 「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』所収 くろしお出版
- 藤田保幸 1988 「『引用』論の視界」『日本語学』9月号 7-9 30-45p. 明治書院
- パフチン, ミハイル 1988 「ことばのジャンル」（佐々木寛訳）『ミハイル・パフチン著作集⑧ ことば 対話 テキスト』所収 新時代社
- 水谷信子 1988 「あいづち論」『日本語学』12月号 7-13 4-11p. 明治書院
- メイナード・K・泉子 1994 「『と』という』表現の機能—話者の発想・発話態度の標識として」『月刊言語』11月号 23-11 80-85p. 大修館書店
- 山崎誠 1993 「引用の助詞『と』の用法を再整理する」『国立国語研究所報告 105 研究報告集 14』1-30p.
- Macaulay, Ronald 1987 "Polyphonic Monologues : Quoted Direct Speech in Oral Narratives." IPRA Papers in Pragmatics, 1 No.2, 1-34p.

#### 【用例出典】

「わら」=フジテレビ『笑っていいとも』1991年12月2日放送

「椎名」=1992年『小説新潮7月号臨時増刊 椎名誠の増刊号』新潮社

談話CD、EN、IJ、母子は、電話の会話を録音したものであり、談話TNは直接対面して行った会話を録音したものである。「談話XY」を提供してくれた文芸・言語研究科の上田香奈子氏と、「談話母子」を提供してくれた地域研究研究科浜崎なおみ氏、また談話に協力してくれた方々に感謝する。